表紙

裏表紙

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。 「お母さん。 뚐さんはこ 0帰ったの。」

「ああ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。\_

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげよう のでした。ジョバンニは窓をあけました。

ジョバンニは玄関げんかんを上って行きますとジョバンニのお母 さんがすぐ入口の室へやに白い巾きれを被かぶって寝やすんでいた てね。わたしはずうっと工合がいいよ。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は凉すずし バンニは靴をぬぎながら云いました。

「お母っかさん。いま帰ったよ。工合ぐあい悪くなかったの。」ジ

家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫むらさき いろのケールやアスパラガスが植えてあって小さな二つの窓には日 ジョバンニが勢いきおいよく帰って来たのは、ある裏町の小さな 覆ひおおいが下りたままになっていました

\*\* 11

ちぶえを吹ふきながらパン屋へ寄ってパンの塊かたまりを一つと角 砂糖を一袋ふくろ買いますと一目散いちもくさんに走りだしました。

に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやは )答えができませんでした。 「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気

が、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指さしま 先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていました

「このばんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうた ( さんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

のごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも

たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、こ ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。 ながら、みんなに問といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。

座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指さし

(れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんと うは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊つるした大きな黒い星

「ではみなさんは、そういうふうに川だと云いわれたり、乳の流

午后ごごの授業

読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気

持ちがするのでした

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょう。」

ところが先生は早くもそれを見附みつけたのでした。

ジョバンニは勢いきおいよく立ちあがりましたが、立って見ると

そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなよ カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパ にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、 のに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后 ムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎しょさいか ラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカ それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネル ネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、 でも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈はずもなかった 黒な頁ページいっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつま ら巨おおきな本をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まっ 僕ぼくは知っていたのだ、勿論もちろんカムパネルラも知っている、 バンニの眼のなかには涙なみだがいっぱいになりました。そうだ ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョ

ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生 の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすっとわらいました。 もうはっきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前

「大きな望遠鏡で銀河をよっく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答える

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼めをカムパネルラの方

うな気がするのでした。

ところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見える んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると 浮うかんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲す るならもっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳の のです。この模型をごらんなさい。」 ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠い う光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空とい なかにまるで細かにうかんでいる脂油しゆの球にもあたるのです。 りの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考え 「ですからもしもこの天あまの川がわがほんとうに川だと考えるな 先生はまた云いました。 その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利じゃ

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸とつい

やこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えそ の遠いのはぼうっと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説 のでわずかの光る粒即すなわち星しか見えないのでしょう。こっち にあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの がみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考え 中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はアンズが薄うすい ます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあって地球がそのすぐ近く 「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶ

> な銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄にわかに顔 いろがよくなって威勢いせいよくおじぎをすると台の下に置いた鞄 ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところ に来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さ かばんをもっておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛く

大時がうってしばらくたったころ、ジョバソニは拾った活字をいっ 合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙だま ばいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き てそれを受け取って微かすかにうなずきました。

ジョバンニは何べんも眼を拭ぬぐいながら活字をだんだんひろい たちが声もたてずこっちも向かずに冷くわらいました。

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人

な平たい函はこをとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてか わたしました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さ けてある壁かべの隅の所へしゃがみ込こむと小さなピンセットでま 「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡 るで粟粒あわつぶぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。 い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルに座すわっ た人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさ

シェードをかけたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えた りしながらたくさん働いて居おりました。

おしまいなさい。」 へだてよへそらをいらんなさい。だはここまだだす。本やノートを お話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外 のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間に なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中

て礼をすると教室を出ました。 を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立: そして教室中はしばらく机つくえの蓋ふたをあけたりしめたり本

カムパネルラをまん中にして校庭の隅すみの桜さくらの木のところ て川へ流す鳥瓜からすうりを取りに行く相談らしかったのです。 に集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえ ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らず

の玉をつるしたりひのきの枝えだにあかりをつけたりいろいろ仕度 て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉 したへをしているのでした。 けれどもジョバンニは手を大きく振ふってどしどし学校の門を出

んの輪転器がばたりばたりとまわり、されで頭をしばったりラムブ 大きな扉とをあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさ じぎをしてジョバンニは靴くつをぬいで上りますと、突つき当りの いってすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人にお 家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲ってある大きな活版処には